露草

松岡隆子

八朔や青空は雲あそばせて

初風の突堤行けるところまで

しばらくは傘ささずとも薄紅葉

散るときを仰がれ秋の百日紅

鉄柵の錆を走れる秋の蟻

雲の間にのぞく青空雁のころ

戦ぎては夕日に透くるゑのこ草

露草が咲く先生の忌の近し

踝に朝の冷えある蛍草

月草の月のしづくに足濡らし

言葉つつしむ桔梗の開きさう

考へてをりて日昏れて槙槇の実

連日暑さが続いているが九月ともなると少しずつ秋の気配が漂いはじめ漸く庭の露草が咲きだした。ほんの数本ばかりだが月の雫を宿したような瑠璃色の花を見ていると心が癒される。先生のご命日を明後日に控え今日は新松子の会の皆さんが先生の墓参に行って下さっている。今回は都合で同行できず一人庭の露草を眺めては、昨年墓域に摘んで供花に添えた露草の青さを思っている。

『岡本眸全句集』は本年度中に刊行する予定だったが、来年四月の七周年記念大会に合わせて立春を目途に刊行することとなった。先生の全句集の刊行を加え、七周年記念を盛大に祝い合いたい。